

<株式会社エフエム東京 第 4 3 9 回放送番組審議会>

1. 開催年月日：平成 29 年 6 月 6 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 10 階 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

横 森 美 奈 子 委員長	渡 辺 貞 夫 委員
内 館 牧 子 委員	秋 元 康 委員
ロバート キャンベル 委員	川 上 未 映 子 委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（11 名）

富木田 代表取締役会長  
千 代 代表取締役社長  
平 専務取締役  
吉 田 常務取締役  
村 上 取締役営業局長  
山 科 常勤監査役  
森 田 執行役員編成制作局長  
兼 株式会社グランド・ロック代表取締役社長  
延 江 営業局エグゼクティブ・プランナー  
宮 野 編成制作局編成部長  
若 杉 編成制作局制作部長  
小 林 編成制作局報道部長兼プロデューサー（オブザーバー）

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 森田放送番組審議会事務局長】

4. 議題： 番組試聴（約 21 分）  
『TIMELINE』  
2017 年 5 月 18 日（木）19:00～19:52

＜議事内容＞

議題 1:最近の活動について

■2017 年 4 月度 聴取率調査結果について

2017 年 4 月度の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果が、ビデオリサーチより発表されました（調査対象期間：2017 年 4 月 17 日～4 月 23 日）。

当社メインターゲット M1F1 層（男女 20～34 才）は前回 2 月度より微増したものの、在京局第 2 位でした。なお年代別では、20 代区分は今回在京単独トップを獲得できましたが、30 代・40 代・50 代区分でスコアを下げたため首位局と差が広がり、更には 19 期（3 年 2 ヶ月）連続首位を獲得していた 12～59 才のリーチ（到達率）も 2 位と順位を下げ、編成面に課題を残す結果となりました。この要因として、特に男性リスナーからの支持を得られておらず、ボリューム層とも言える 30 代・40 代のリーチと聴取分数の減退が大きく影響しています。他局研究と合わせて、改めて当社放送が取り上げる話題、選曲、企画内容の品質について編成制作一丸となって全番組を総点検し、聴取率向上に取り組んでまいります。

■第 54 回 ギャラクシー賞 ラジオ部門優秀賞受賞

TOKYO FM 特別番組 ミュージック ドキュメント

井上陽水×ロバート キャンベル 「言の葉の海に漕ぎ出して」

6 月 1 日、「第 54 回ギャラクシー賞」(放送批評懇談会)の贈賞式が行われ、ラジオ部門において、TOKYO FM が企画制作した『TOKYO FM 特別番組 ミュージック ドキュメント 井上陽水×ロバート キャンベル「言の葉の海に漕ぎ出して」』(2016 年 11 月 23 日 19:00～20:47 放送)が優秀賞を受賞致しました。

＜放送批評懇談会の講評より抜粋＞

日本文学研究者のロバート キャンベルとミュージシャン井上陽水の対談形式で、二人が陽水作品の日本語としての本質を探る過程は興味深いです。キャンベルは療養中に陽水作品の歌詞に触れたことで、その英訳を通して解釈の違いを弁証法的に展開します。陽水自身は歌詞を理詰めで追う作業に違和感を持ちつつ、キャンベルの姿勢に徐々に引き込まれる様は聴き応えがあります。この真摯な「言の葉の海に漕ぎ出す」共同作業の軌跡を追うことで陽水作品の魅力を再発見します。

<第 439 回放送番組審議会議事録>

また、TOKYO FM 制作番組『高橋みなみの「これから、何する？」』(2016年9月20日(火)13:00~14:55 放送)、『山下達郎のサンデー・ソングブック』(2016年8月28日(日)14:00~14:55 放送)も、ラジオ部門「奨励賞」を受賞しました。

**【委員の意見および社側説明】**

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○先ほど聴取率の説明で女性に強いという説明があったが、やはり男女両方の聴取率を獲得するのは難しいのか？男女で趣向が違う中、両者ともに数字を獲得することを目的として放送しているのか？

■もちろんそう心がけている。結果的にどちらかに偏ってしまうのは仕方ないが、聴取者数全体の底上げは行いたいと思っている。男女とも（聴取者数の）底上げをして、その上でターゲットを考えたい。

○何かを売るにしても女性に訴えなければ売れないと言われているので、女性をしっかりと捉えているのは、大変良いことだと思う。それをベースに、そこから先どうするかを考えていくべき。

○具体的な強化ポイントはあるのか。男性を強化するにあたり何か具体策があるのか。

■FM ラジオということもあり、放送の7割近くが音楽中心の編成。コンテンツの核である音楽（選曲）を見直していこうと計画している。男性は特に理性的な部分を持つと考えられ、「音楽力」を手にした人も多く、とりわけ30代を過ぎてくるとネットやYouTubeで手に入らない音楽を求める人も増える。先日、初めて全番組の現場ディレクターの会議を開催した。そこで選曲についても議論した。そういう部分から変えていこうと計画している。取り扱う話題については女性からの支持が得られているので、そこは崩さないようにしたい。

○洋楽、邦楽の比率はどのくらいか。

■番組によって違いもあるが、6:4～7:3で邦楽が中心。若年層の洋楽離れが著しいので、邦楽を増やそうという動きはある。

○テイラー・スウィフトのように話題になるアーティストもいたので洋楽シーンも元気なように見えたが、局所的なものにも思える。

○音楽コンテンツに男女の差はあるのか？例えば、男性の方が洋楽が好きとか女性の方が邦楽が好きとかそういうものはあるのか？

<第 439 回放送番組審議会議事録>

■そういうものはないように思える。ポピュラーなものを中心に据えつつも、もちろんポピュリズムだけを取り扱おうというのではなく、ニッチだったり、「いいもの」を紹介してこそとは思っているので、うまく塗っていきたいと考える。

## 議題 2 : 番組試聴

【番組名】 『TIMELINE』

【放送日時】 2017年5月18日（木）19:00～19:52

### 【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、平日 月曜～木曜 19 時から放送している報道番組、『TIMELINE（タイムライン）』の 5 月 18 日（木）放送のダイジェストです。2010 年 4 月にスタートしたこの番組は、「様々な出来事の『糸』を手繰って、今日という一日の意味を感じる」をテーマに、今日気になるニュースや話題のトピックスを通じて、新たな視点や思索をお届けしているプログラムです。

パーソナリティーは曜日替わりで、ジャーナリスト・佐々木俊尚、ライター・速水健朗、著述家・古谷経衡、社会派ブロガー・ちきりん、経済学者・飯田泰之、コラムニスト・小田嶋隆がつとめ、進行を TOKYO FM アナウンサーの今井広海と古賀涼子が交替で担当しています。

5 月 18 日（木）の放送では、音楽雑誌『rockin'on』の総編集長・山崎洋一郎氏をゲストに迎え、「日本のロックはいま、どこにあるのか？」を特集しました。全国各地で開催され、出演アーティストが続々と発表されている夏フェスの代表的なものには、『ROCK IN JAPAN FES.』『FUJI ROCK FESTIVAL』と「ロック」を冠したフェスがあるように、「ロック」を満喫するシーンとして夏フェスはお馴染みになりましたが、その一方で、「ロック」という言葉が昨今あまり使われなくなったという指摘もあります。何故、「ロック」という言葉は使われなくなったのか。その背景や、「ロック」という言葉が使われなくなった時代だからこその「ロック」の可能性やチャンスについてニュースプログラムの視点で考えた放送回です。

#### ■当日のオンエア楽曲

- ・「優先席に座りたい」／町あかり
- ・「ガストロンジャー」／エレファントカシマシ
- ・「Rock&Roll」／The Velvet Underground

※ 『TIMELINE』 パーソナリティー

<月曜> 佐々木俊尚 (ささき としなお)

ジャーナリスト・評論家。毎日新聞社などを経て、フリージャーナリストとして IT、メディア分野を中心に執筆している。



<火曜> 1・3・5週 速水健朗 (はやみず けんろう)

ライター・編集者。アスキーにて契約編集者を務めた後に、フリーの編集者・ライターに転向。メディア論、都市論から音楽、文学、格闘技まで幅広い分野で執筆編集活動を行う。



2・4週 古谷経衡 (ふるや つねひら)

評論家、著述家。インターネットと保守、マスコミ問題、アニメ評論などのテーマで執筆活動を行う。最近の著作は『「意識高い系」の研究』『左翼も右翼もウソばかり』等。



<水曜> 1・3・5週 ちきりん

社会派ブロガー。「未来の働き方を考えよう」「悩みどころと逃げどころ」「社会派ちきりんの世界を歩いて考えよう！」等 多くの書籍を出版。



2・4週 飯田泰之 (いいだ やすゆき)

明治大学政治経済学部准教授。専門は、経済政策・マクロ経済学。テレビ・出版・WEB メディアでも活躍。



<木曜> 小田嶋隆 (おだじま たかし)

コラムニスト、テクニカルライター。様々な事物を辛口に論じるコラムニストとして活躍。「超・反知性主義入門」「ザ、コラム」等 多くの書籍を出版。



**【委員の意見および社側説明】**

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○女性アナウンサーが騒々しくもなく、変に甘くもなく、トーンが良かった。今の温度をキープして欲しい。テレビの報道番組などでも女性アナウンサーの合う合わないはあって、甘すぎて不快な時があったりする。

○一言でニュースの感想を言うのが難しいだろうと思った。「こういうニュースがありました」に続き、簡単にコメント述べているが、文字数にしたら 40～50 文字くらい。そうするとどうしてもコメントがありきたりになってしまう。これだけのパーソナリティを集めているのだから、難しいだろうが（ありきたりにならないよう）心がけてほしい。

○「日本のロックは今どこにあるのか」というテーマは大変面白かった。ただ、中身が少し物足りなかった。この部分は編集によりカットしていないのか？

■このパートはしていない。

○ロックな生き方で代表されるあるロックスターが（決まり文句として）「ロッケンロー！」と言うと、笑いや拍手が起きたりする。ある意味でそれはアントニオ猪木の「ダー！」と一緒に約束の言葉。約束になってしまうと、ロックが本来持っていた反逆性がなくなるというか、そもそもロックは「笑い」が起きるものではなかったはず。なので、山崎総編集長のおっしゃることは良く分かった。しかし、もう少し掘り下げてほしかった。

○「過去にロックが落ち目になり、またロックが上がってきているから」と言っていたが、過去にロックが落ち目になりまた上がってきたからと言って再び蘇る理由にはならない。なので、もう一度上がって来る理由を述べて欲しかった。また、最近の若者の生き方についても触れてほしかった。（自分も）スマートフォンを初めて使った時は情報の多さに驚いたが、ここに小さい時から触れ続けている若者にロックな生き方ができるのか、と思った。

○タイムラインという番組は面白いと思った。ぜひこれからも興味深いテーマを扱って欲しい。

○今でもロックの世界では 8 ビートが主流になっているが、ロックという音楽自体が古くなったのを感じる。加えて最近の若い子たちにとって「ロック」という言葉が音楽用語としても古いものになったのかも知れない。



○女性アナウンサーと小田嶋さんの声のトーンが聴いていて心地よかった。解説もとても丁寧だと感じた。最初にニュースリールのようにいくつかのニュースが音声であって、その後に解説があって、特集部分では街に繰り出して「ロック」について若者から生の声を拾い、そこからゲストが入る、という構成が良いと思った。一つもったいなく感じたのは、冒頭の部分で日本人の男性の声が続いていて、誰が誰だか聴き分けられずに、最後の人で初めて官房長官かということが分かった。もう少し音の模様（差異）がつかるといいのでは。

○女性アナウンサーが、ニュースをまとめて一言コメントをしているが、誰でも思うようなありきたりなことを言っているように聴こえる。シャープさを感じない。

○番組からは、ロックがいろいろ変化して、ロックという言葉がマイナスのイメージを帯びているのは伝わった。しかし今のロックが実際にその中で変わっていくという、ロックの音楽的な部分に話を戻していない。最後はロックという言葉じゃなくてロックという音楽に戻さないといけないと思った。

○この番組は平日の 19 時から放送だが、対象としているリスナーはどんな年齢層なのか？

■本当は M1F1 をターゲットとしたいが、社会事象を正面から捉えるというコンセプトから若年層の支持がなかなか難しく、実際は 30 代をターゲットとしている。

○パーソナリティが小田嶋さんということで、10 代 20 代をターゲットとするのは難しいだろうなと感じた。今回の特集も小田嶋さんの年齢、山崎総編集長の年齢を考えると、ここで語られているロックは、もう青春が終わった若者ではない人、しかしまだロックを聴いている人が、若者とロックを分析していたと思うが、すでに知っていることに終始していた。「今はスマホが普及してネットで気軽に音楽にアクセスできる時代。音楽にお金を払うことが少なくなった」と。特に 30 代以上の人にとって「ロッキング・オン」はある種音楽の権威というか、そこに掲載されればお墨付きであり、名誉なことだった。それは山崎総編集長でなければ聴けないことが聴けるのではないかという期待を持たせた。実際聴いてみたら、失われたロックについて掘り下げるわけではなく、若者の今のロックシーンでもなかった。誰にとってのロックを話しているのかが定まらずちょっと分かりにくかった。ロックについて漠然としていて、もっと具体的な話ができて良かったと思う。ロックじゃなくても、例えばアイドルなど、かつてロックが担っていたものを担えるジャンルが出てきたというのは腑

に落ちたが、そこからもっと具体的に今のロックの話が聴けたらもっとイメージができたと思う。

○報道番組ということだが、ひとりワイドショーのようだ。ひとりのコメンテーターがコメントをするというのはかなりのコメント力を要すると思う。

○曜日替わりのコメンテーターのラインナップを見ると、若い方もそうでない方もいてバリエーション豊かだなと感じた。取り扱う話題によってどうコメントするのかがとても重要になってくると思う。

○ものごとが流行るか流行らないかの背景には社会と関わることも重要だが、ロックの台頭は反体制・反権力・アンチテーゼが当時の若者の共感を得たから。今に置き換えると、社会への反抗の方法はロックを選ばなくてもいくらでもあるように感じる。また時代も「ゆる」くなっている。ファッションも同じで、今はロックと同じくらい使われなくなった。みんなが（ファッションに）興味がなくなったと感じている。ロックが今までと同じように「ロック」として取り上げられることはもうないのかも知れない。ただ、純粋な音楽としてのロックは生き続けるのでは。

○既得権益・メジャーとは無縁でインディペンデントで活動する若い編集者などの話も聴いてみたいと思った。

■短い時間の中という事情もあったが、グリップが弱かったとは思う。山崎総編集長は小田嶋隆さんとは同世代で、50代半ばのロックを称えたところで先に進まず終わってしまったのは否めない。

○全盛期のロックを語る貴重な生き証人なのでもっと切り込んでほしかった。

■生放送で、時間も20分のコーナーなので限りはあったが、もっと工夫はできたと思うので、事前の打ち合わせで取捨選択するなどきっちり考えたい。

5.放送番組審議会の内容について

審議会の意見は、放送番組審議会事務局から各担当部長に伝達した。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「JOGLIS」

6月24日(土) 7:00~7:20 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <http://www.tfm.co.jp/>

7.その他

次回の放送番組審議会を、7月4日(火)に開催することを決めた。